

くじら日記

太地町立博物館から

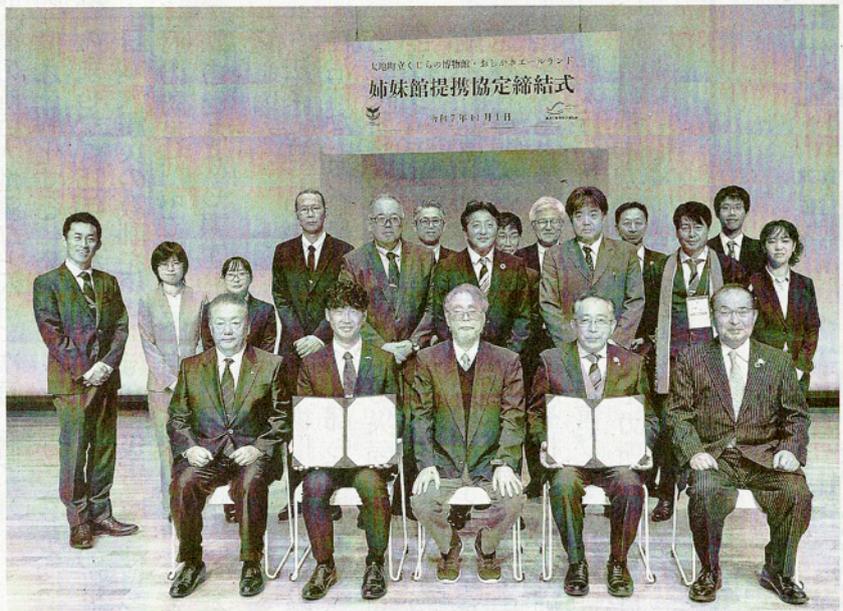


令和7年11月1日、宮城県石巻市で開催された「全国鯨フォーラム2025」を契機として、太地町立くじらの博物館は同市の鯨類文化紹介施設「おしかホエールランド」と姉妹館提携を締結しました。将来に向け、相互協力による活動の推進と施設の発展、そして鯨類資源の持続的利用への貢献を目的としています。

締結式には、両施設関係者約20人が集まりました。太地町長と石巻市長の立ち会いのもと、筆者とおしかホエールランド代表の齋藤富嗣氏は、調印書に目を通し、署名のためにペンをとりました。それぞれの施設を長く、近くで見守ってきた方々の視線に筆者は少し緊張しつつも、名前を書き入れました。

「これで、おしかホエールランドの及川伸悦館長の思いもくむことができた」と、両施設の名誉館長の加藤秀弘先生は締結後のあいさつでこう

「クジラのまち」石巻から ③



石巻市マルホンまきあーとテラスで締結されたおしかホエールランドとの姉妹館提携（石巻市提供）

述べました。

及川氏は昭和35年、合併前の牡鹿町（現石巻市）に生まれました。牡鹿で育ち、旧牡鹿町役場に務め、牡鹿総合支所長やおしかホエールランド館長などを歴任しました。令和5年に62歳で生涯を閉じるまで、クジラとともに歩み、地域や捕鯨を支えた一人でした。

加藤先生が初めて及川氏と出会ったのは、水産庁遠洋水産研究所の鯨類生態研究室

長になって間もない平成2年頃でした。おしかホエールランドのオープンに向け、クジラのモニタメントや骨格標本の作製の協力に訪れたときのことです。加藤先生は及川氏について「郷土愛にあふれていた。おしかホエールランドを核に振興を進めたいという思いが伝わってきた」と振り返ります。

一方で、加藤先生が牡鹿半島の鮎川を拠点とした調査捕鯨の陣頭をとるときには、現地の調整や準備で、及川氏に助けられたこともあったそうです。及川氏は太地への憧れが強かったとも言い、牡鹿の将来について語られる中で、この「姉妹館提携」が発想されたのでした。

しかし、及川氏は館長在任中に逝去されました。加藤先生は「名誉館長ではあったが何もできなかった。意志を引き継ごうと思った」と当時の決意を口にしました。こうした先人の思いが紡がれ、太地と石巻の施設が「姉妹館」と

して、締結にいたったのです。提携翌日、両施設の学芸員の交流から、記念ワークショップ「イルカの耳の骨のレプリカをつくらう」をおしかホエールランドで開催しました。樹脂をお湯で軟化させ、それを耳骨の型に入れて固めます。色を選べたり、ストラップを取り付けたりできるため、子供が興味をもち、同時にイルカの耳骨の形や大きさに驚く様子が印象的でした。この標本の由来は太地で身近なスズイルカです。地域に暮らす鯨類を紹介する機会にもなりました。

両施設は一見、鯨類を専門とし共通点も多いように思われますが、地域によって捕鯨の歴史や文化、そして目の前の海に生息する鯨類は大きく異なります。これからは、太地と石巻、それぞれのクジラの世界に通じる「窓」としての役割と機能を、さらに大きくできるのです。

（太地町立くじらの博物館館長 稲森大樹）

先人の思い紡がれた「姉妹館提携」